

関東方言と関西方言に対する顕在的・潜在的態度と社会的選好の関連性

中野 愛美華

(池田 慎之介ゼミ)

私達は、住んでいる地域によってそれぞれのイントネーションやそれぞれに方言が存在する。町・樋口・深田(2006)は方言とは、地理的な差異を生み出す、同一言語内における音韻・語彙・文法的な差異であり、共通語・標準語とは異なることばであると定義している。また、小林(2008)によると、最近の若者の間では、関東方言を骨組みに多種の方言を交えた会話が成り立っている。さらに、2004年頃は、関東方言のなかに埋められたいわば、「アクセサリー」として方言は使われていた。例えば、「ごめん」という関東方言に「～やん」で「ごめんやん」などがある。これはあくまでも使用者が地元の方言を選択的に使用していたのだ。さらに、2008年頃では、東京の若者たちが母語方言でない全国各地の方言を取り込んでメール、会話をしている。このような方言の使い方を田中ゆかり(2007)は「おもちゃ化」と名付けた。つまり、方言は若者の「流行り」であるといえる。

岡本(1985)によると、方言やアクセントは説得という場面において影響を及ぼすことがわかっている。このように、方言は人に与える印象を左右する情報である。

また、1990年頃の言語学の領域では関東方言と方言への態度に関する研究が多くされている。例えば、岡本(2001)がある。この研究では、男性と女性の自己紹介文を作成した後、それをもとに関東方言、名古屋方言の2つのパターンを用意した。それを、同一の話者での声で録音したものを実験参加者に聞いてもらい、印象を評価してもらった。このように、同一の話者が複数の言語を話し、比較する手法をマッチドガイズ法(MGT)という。この手法を取り入れることで、言語を比較する際に、別の人物がそれぞれ話すよりも、声の高さやかすれなどの個人差を除去できるメリットがある。その結果、関東方言は名古屋方言に比べて、知的や積極的な印象など全体的に高く評価

されている。また、名古屋方言では、社交性などの一部の項目での高い評価となった。これは、関東方言以外の方言は知的次元で低いと見なされている(井上, 1980)と一致して解釈できる。

さらに、永田(1989)は大阪府、兵庫県に在住の人を対象に関西方言と関東方言の印象比較をした。その結果、若い世代において関東方言を親密性について高く評価しており、知性においても高く評価していることがわかっている。また、大人世代では関西方言の親密性について高く評価している。

また、従来の研究では、関東方言と関西方言に対する顕在的な態度が注目されており、潜在的な態度での研究は多くない。森尾(2007)によると、顕在的な態度とは、内省することによって意識することができる態度のことである。また潜在的態度とは、自分では意識することができないが持っている態度である。顕在的な態度の測定では、望ましくない印象を控えるようなバイアスがかかる可能性がある。そこで、潜在的な態度が測定できる、潜在連合テスト(以下、IAT)を用いた研究が行われた。IATとは、高い信頼性と妥当性を持つので、多岐にわたる研究で用いられており、潜在的態度を測定できる手法である。例えば、渡辺・唐沢(2013)がある。この研究では関東方言と関西方言を同一人物が同じ内容の音声で録音し、実験参加者に聞いてもらい、印象評価を行った。その後、関西方言の単語刺激の意味が理解できることを保証するために、単語確認テストを行った。次に、IATを使った潜在的測定も行った。その結果、顕在的な評価では関西方言の方が関東方言に比べて暖かい印象を受けることがわかった。一方で関東方言の方が関西方言より知的な印象を受けた。また、潜在的評価では、関東方言の方が全体的に高い評価を受けた。

このように、1980年頃に比べて、顕在的な評価に

については、変化してきている。具体的には、1980年頃は全体的に関東方言に比べて関西方言は低く評価されていた。そこから約30年間で関西方言は暖かさの項目で関東方言よりも高い評価と変化した。

潜在的な態度の変化においては、鎌谷・伊藤・宮崎・河原(2021)がある。これは、COVID-19の社会的な流行による、黒マスク着用者への顕在的・潜在的な態度の変容についての研究だ。顕在的な態度では、流行前と流行後で白マスクと黒マスクを着用した人物の顔の魅力について回答を求めた。その結果、流行前に、魅力評定値が低かった人は流行後、魅力評定値が上昇していることが明らかになった。潜在的な態度では、黒マスクに対してネガティブな潜在的態度が持たれており、流行前、流行後、共に否定的な態度が見られたということだ。

このように、顕在的な態度の変化が先に現れ、潜在的な態度が変化するには、長期的な社会変化または社会変化からの時間が必要であると考えられるので、約30年間の顕在的、潜在的態度は、変容したとは言い切れない。

奥村・鹿子木・竹内・板倉(2014)では、方言話者に対する社会的選好について研究している。この研究の参加者は、母方言が関西方言の9ヶ月児と12ヶ月児であった。まず、関西方言話者と関東方言話者1人ずつが登場し、16秒ずつ参加児に対してそれぞれの方言で同じ内容の言葉を喋った。次に、同時に2人の話者が並んで登場し、話者は言葉を発さずに、同じぬいぐるみを持ち同じ動作を行った。その後、参加児がどちらのぬいぐるみに手を伸ばすのか観察した。その結果、養育環境にある母方言話者に対して選択的に社会的選好を示した。この先行研究から、方言が社会的選好の手がかりになるということが証明された。しかし、実験参加者が9ヶ月児、12ヶ月児であるので、言語発達が十分でないと考えられる。よって、大学生で検証を行う。また、この結果が、潜在的な態度が影響しているのか顕在的な態度が影響しているのか明らかではない。したがって、本研究では、この社会的選好が潜在的な態度が影響しているのか、顕在的な態度が影響しているのか検証する。

仮説

顕在的な評価については、先行研究に基づき、関東方言は知的評価(知性)が高く評価され、関西方言では、情的評価(暖かさ)が高く評価されると予測される。潜在的評価については、関西方言は対する顕在的な評価は一過性のものであり、関西方言よりも関東方言が高く評価されると考えられる。また、潜在的に関東方言が高く評価されているのであれば、関東方言話者の物体を選択すると予想される。

目的

本研究では関東方言と関西方言の言語の違いが印象評価に与える影響を会話を用いた顕在的な側面と単語群を用いた潜在的側面から検証し、物体を選択する社会的選好との関連性を検討する。

方法

参加者

実験は、2022年11月に、大学生49人(男性24名、女性24名、その他1名)を対象として実施した。他に、男性1名も実験に参加したが、潜在的評価の測定において、正解が一問もなかったため、除外した。参加者の平均年齢は、20.64歳($SD = 1.36$)であった。それぞれの参加者と同性の条件になるように配置した。性別において、その他を選択した実験者は女性条件に配置した。

材料

実験には、顕在的な評価の測定のための音声刺激、社会的選好のための映像刺激の視聴にはiPadを使用した。また、Google formで回答する際は、それぞれの携帯端末で回答してもらった。さらに、潜在的評価の測定のためのIATは、タブレット(HUAWEI MediaPad T5)を使用した。

手続き

実験はコンピュータを用いて行われた。課題は、音声刺激の提示、顕在的な評価の測定、物体の選択問題、単語確認テスト、潜在的評価の測定、事後質問の順序で行われた。

関東方言と関西方言に対する顕在的・潜在的態度と社会的選好の関連性

関東方言 (A:山田 B:田中)

- A. あれっ？ B. さんだよね？
 B. ああ、前の語学の授業で一緒だった、A. さん？
 A. ひさしぶりだね！
 B. うん、ひさしぶり！1年生のとき以来じゃない？
 A. おお、すごい久しぶり。B. さんも、この授業とるの？
 B. うーん、今まだ悩んでるところなんだ。今日初めて来たんだけど、先週のこの授業、どんな感じだった？
 A. えーっと、先生の話も分かりやすいし、テーマも個人的には興味深い分野だから、面白そうかなって思った。ただ評価が厳しいって噂も聞いて、手堅く単位取りたいから、もうちょっと他の授業も見てから考えようかな、と思ってる。
 B. うーん、この時間だと、他にもたくさん良さそうな授業あるよね。先週、英語の授業に出てみたんだけど、英語も楽しそうだったよ。
 A. へえ、どうだった？
 B. 何か先生が、気さくで明るい感じだった。それに、他の学部からもいっぱい人が来てたから、色々参考にもなるかもしれないよ。
 A. それも良さそうだね！評価はどういう形式なの？
 B. 出席と、ひとり一回のプレゼンで評価されるんだった。
 A. プレゼンかー。
 B. しかも英語だよ。
 A. あんまり英語でプレゼンした経験ないから、ちょっとなー。
 B. そうだよ。でも、英語もこれから社会に出たら、しっかり勉強する時間もなかなかないだろうし、学生の内に勉強しておきたいなあ。
 A. そうだね。海外行ったときに話せると違うだろうし。履修登録の期限も来週いっぱいまであるし、来週は、英語の授業に出てみようかな。
 B. うん、一度見てみて決めるのいいと思うよ。あの先生は、人によって合う合わないありそうかも。
 A. そっか、教えてくれてありがと。
 B. うん、またね。今度ゆっくり話そう。

関西方言 (A: 山田 B:田中)

- A. あれっ？ B. さんやんね？
 B. ああ、前の語学の授業で一緒やった、A. さん？
 A. ひさしぶり！
 B. うん、ひさしぶり！1回生のとき以来ちゃう？
 A. おお、めっちゃ久しぶり。B. さんも、この授業とるん？
 B. うーん、今まだ悩んでるとこやねん。今日初めて来てんけど、先週のこの授業、どんな感じやった？
 A. えーっと、先生の話も分かりやすいし、テーマも個人的には興味深い分野から、面白そうかな思った。ただ評価が厳しいって噂も聞いて、手堅く単位取りたいから、もうちょっと他の授業も見てから考えようかな、と思ってんねん。
 B. うーん、この時間やと、他にもたくさん良さそうな授業あるよなあ。先週、英語の授業に出てみてんけど、英語も楽しそうやった。
 A. へえ、どうやった？
 B. 何か先生が、気さくで明るい感じやった。それに、他の学部からもいっぱい人が来てたから、色々参考にもなるかもしらんで。
 A. それも良さそうやな！評価はどういう形式なの？
 B. 出席と、ひとり一回のプレゼンで評価されるんやって。
 A. プレゼンかー。
 B. しかも英語。
 A. あんまり英語でプレゼンした経験ないから、ちょっとなー。
 B. そうやんな。でも、英語もこれから社会に出たら、しっかり勉強する時間もなかなかないやろうし、学生の内に勉強しておきたいなあ。
 A. そうやな。海外行ったときに話せると違うやろうしね。履修登録の期限も来週いっぱいまであるし、来週は、英語の授業に出てみようかな。
 B. うん、一度見てみて決めるのいいと思う。あの先生は、人によって合う合わないありそうやもん。
 A. そっか、教えてくれてありがと。
 B. うん、またな。今度ゆっくり話そう。

図1 会話文台本

音声刺激

実験に用いる音声刺激として、男性・女性による会話文を作成した(図1)。刺激文を作成するにあたって、渡辺・唐沢(2013)の会話文を現代の大学生にとって自然な関東方言、関西方言にアレンジした。また、大学生活を題材にした会話文であった。関東方言の刺激文については、実験者・研究者とは異なる関東出身者に関東方言話者の表現に誤りがないか点検してもらい、問題はないことが確認された。

本実験の音声刺激は、上記で述べたマッチドダイズ手法(MGT)を採用した。具体的には、関西出身で現在関東に在住している女性1名と関東出身で現在関西に在住している男性1名に協力を依頼した。特に、アクセントやイントネーションに配慮して会話文を音読してもらった。その後、文章刺激の点検者とは別の関東方言話者に問題がないか音声聞いてもらい、確認してもらった。音声刺激の会話文は、AとBの2人の人物が会話しているものを聞いてもらう。関東方言、関西方言ともにAを女性、Bを男性に設定し、実験参加者

と同性の印象を答えてもらった。なお、会話文はイヤホンを使用し、聞いてもらった。

顕在的評価の測定

実験参加者に音声刺激を聞いてもらった後に、Google formを用いて、登場する人物AもしくはBに対する印象評定を行った。印象評定の項目は渡辺・唐沢(2013)の実験から使用した。20項目あり、7件法で回答を求めた。具体的には、“近づきたい—人懐っこい”、“非社会的な—社会的な”、“親しみにくい—親しみやすい”、“冷たい—暖かい”、“暗い—明るい”、“沈んだ—うきうきした”、“人のわるい—人のよい”、“なまいきな—なまいきでない”、“感じのわるい—感じのよい”、“不親切な—親切な”、“知的でない—知的な”、“不真面目な—真面目な”、“軽薄な—重厚な”、“忍耐力のない—忍耐力のある”、“責任感のない—責任感のある”、“言葉遣いがきたない—きれいな”、“想像力のない—想像力のある”、“リーダー的でない—リーダー的な”、“ユーモアがない—ユーモアがある”、“話がへたな—上手い”である。

物体選択における社会的嗜好

次に、お土産を渡すというシチュエーションを用いた映像刺激を iPad で見てもらった。映像は、男性二人、女性二人に協力を求めた。顔の好みに影響しないように、肩の辺りまで写し、無言で渡す動作をしてもらった。胸の前でお土産を持ち、それを相手に差し出すような動作を行った。動画はそれぞれ、4秒であった。また、実験参加者と同性から受け取るように動画を見てもらった。その際、先ほどの方言の印象などからどちらの方言話者から貰いたいか回答してもらおうと教示した。さらに、実験参加者に口頭で動画の方言話者をランダムに振り分け、カウンターバランスをとった。物体は、お土産の好みなどが影響しないように白の紙袋で渡す。動画視聴後、どちらの方言者からお土産を貰いたかったか、Google form で回答を求めた。

単語確認テスト

関西方言・関東方言が理解できているかを確認するために、単語テストを Google form を用いて行った。具体的に、“ありがとう—おおきに”、“たくさん—ぎょうさん”、“いけない—あかん”、“なんですか—なんやねん”、“ちがう—ちゃう”の各単語が同じ意味であることを確認した上でそれぞれの単語がどのぐらい好ましいか7件法で回答を求めた。次に、上の5つの関西方言を一つずつ提示し、4つの関東方言の中から、同じ意味のものを選択してもらおうよう指示した。

潜在的評価の測定

次に、関東方言と関西方言に対する潜在的評価を IAT で用いておこなった。本研究では、左上と右上に関東方言、関西方言の対象方言もしくは、良い、悪いで評価語が表示され、画面中央の単語刺

激が左上か右上のどちらかに分類してもらおう(図2)。

その際の単語刺激は、単語確認テストで使用した、関東方言(ありがとう・たくさん・いけない・なんですか・ちがう)か、関西方言(おおきに・ぎょうさん・あかん・なんやねん・ちゃう)であった。ほかに、評価を表す単語の場合は、単語が良い(良い・よい・ポジティブ・positive・good)か、悪い(悪い・わるい・ネガティブ・negative・bad)であった。単語のカテゴリー判断は、タップで行った。参加者には、提示されたか単語の分別をできるだけ早く正確に行うように指示した。単語が提示され分別されると単語は消えるように設定され、250ms後に次の単語が提示された。全部で7ブロックからなり、1ブロックは、良いと悪いの評価に分別する練習試行で、2ブロックは、関東方言と関西方言に分別する練習試行であった。3ブロックは、ブロック1の評価とブロック2の方言を組み合わせで分別する練習試行であった。具体的には、左上に関東方言もしくは良いと表示し、右上に関西方言もしくは悪いと表示し、提示された単語を左右に分別するものであった。4ブロックは、3ブロックの本試行であった。5ブロックは、1ブロックの良いと悪いの位置を逆にし、分別する練習試行で、6ブロックは、2ブロックの方言と5ブロックの評価を組み合わせで分別する練習試行であった。具体的には、左上には、関東方言もしくは悪いと表示し、は右上には、関西方言もしくは良いと表示し、提示された単語を左右に分別するものであった。7ブロックは、6ブロックの本試行であった。練習試行のブロックは20試行であり、本試行は40試行から構成された。4ブロックを一致ブロック、7ブロックを不一致ブロックとし、半数の参加者は一致ブロックを先に行い、もう半数の参加者には不一致ブロックを先に行って

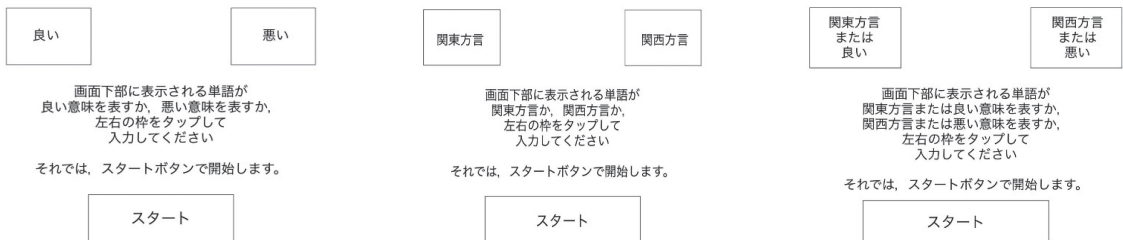


図2 潜在的評価の実験画面

関東方言と関西方言に対する顕在的・潜在的態度と社会的選好の関連性

もらうことにより、ブロックの順序ではカウンターバランスをとった。

事後質問

潜在的評価の測定後、参加者に年齢や性別、出身地、関西方言の使用年数について回答を求めた。

結果

顕在的評価

関東方言と関西方言の音声刺激における印象評価項目について3相関因子分析を行った。因子抽出に、最尤法を使用しプロマックス回転を行った。結果、2因子解を採択した。項目の選択においては、関東方言、関西方言それぞれ行った。第一の因子である暖かさ因子においては、“.50以上の因子負担があり、知的因子が、.50以下の因子負担である”という基準を設けた。また第二の因子である知的因子においても、“.50以上の因子負担があり、知的因子が、.50以下の因子負担である”という基準を設けた。その結果、関東方言の因子において20項目中、基準を満たしていない3項目を除外することになった(表1)。

また、関西方言の因子においては、20項目中、基準を満たしていない、5項目を除外した(表2)。

表1 関東方言における印象評定項目

関東方言	第1因子	第2因子
冷たい-暖かい	.899	-.015
暗い-暖かい	.834	-.104
近づきがたい-人懐っこい	.826	-.159
親しみにくい-親しみやすい	.819	-.124
非社交的な-社交的な	.766	.002
沈んだ-うきうきした	.739	-.092
感じのわるい-感じのよい	.621	.392
ユーモアがない-ユーモアがある	.548	-.169
人のわるい-人のよい	.539	.320
不親切な-親切的な	.510	.328
知的でない-知的である	-.187	.791
責任感のない-責任感のある	-.238	.751
忍耐力のない-忍耐力のある	-.092	.683
なまいきな-なまいきでない	-.053	.623
軽薄な-重厚な	.200	.573
不真面目な-真面目な	.055	.522
言葉遣いがきたない-きれいな	-.054	.509

次に、第一因子の暖かさ因子について、関西方言話者と関東方言話者を比較するために、*t*検定を行った(図3)。その結果、関西方言話者は関東方言話者よりも暖かいと評価されることがわかった($t(48) = -2.33, p = .024$)。

また、第二因子の知的因子においても同様に*t*検定を行った(図4)。その結果、関東方言話者は関西方言話者よりも知性が高いと評価された($t(48) = 9.38, p < .001$)。

表2 関西方言における印象評定項目

関西方言	第1因子	第2因子
非社交的な-社交的な	.906	-.196
冷たい-暖かい	.819	-.108
親しみにくい-親しみやすい	.761	-.038
感じのわるい-感じのよい	.736	.087
近づきがたい-人懐っこい	.567	.174
不親切な-親切的な	.564	.313
人のわるい-人のよい	.537	.147
暗い-暖かい	.513	-.064
知的でない-知的である	-.160	.942
軽薄な-重厚な	.170	.749
なまいきな-なまいきでない	-.070	.729
責任感のない-責任感のある	-.058	.684
言葉遣いがきたない-きれいな	-.158	.662
不真面目な-真面目な	.069	.639
忍耐力のない-忍耐力のある	.070	.527

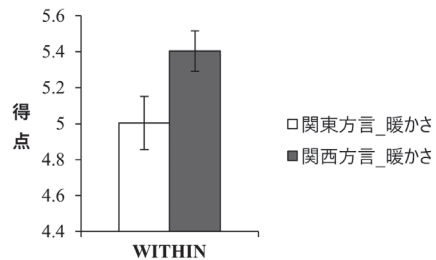


図3 関東方言、関西方言の暖かさ因子

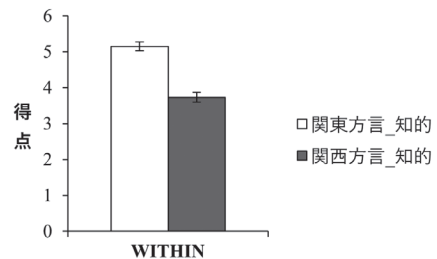


図4 関東方言、関西方言の知的因子

物体選択における社会的選好

関東方言、関西方言話者からお土産をもらうという物体選択においてどちらを選ぶか分析を行った。関東話者を選択したのは、20人(40.8%)であった。また、関西方言話者を29人(59.2%)であった。二項検定の結果、選択人数に有意な偏りはみられなかった($p = .199$, 両側検定)。この結果は先行研究とは一致しなかった。その原因として、先行研究では、実験参加者の出身地が関西出身者で統一されており、本研究とは異なることが挙げられる。なので、次に、関東方言話者と関西方言話者の社会的選好と関西方言の使用年数に差があるか分析を行った(図5)。結果、使用年数と選好に有意差はみられなかった($t(47) = -0.851$, $p = .399$)。

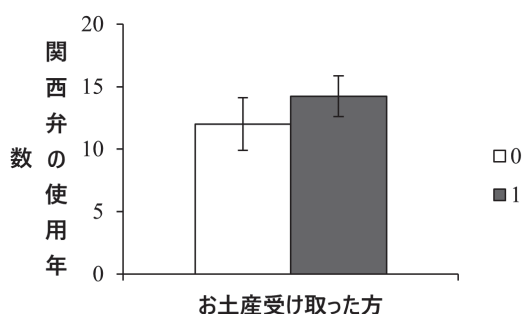


図5 使用年数とお土産選択の差 (0 = 関西方言、1 = 関東方言)

さらに、顕在的評価との相関を明らかにするために、相関分析を行った。関東方言に暖かい印象を受けた人と社会的選好には相関はなかった($r = -.253$, $p = .079$)。関東方言に知的な印象を持った人と社会的選好にも相関はみられなかった($r = -.041$, $p = .779$)。一方で関西方言に暖かい印象を持った人と社会的選好では相関がみられた($r = .357$, $p = .012$)。また、関西方言に知的な印象を持った人と社会的選好にも相関がみられた($r = .377$, $p = .008$)。

単語確認テスト

次に、単語確認テストの回答について分析を行った。全体の正答率は100%という結果になった。すなわち、今回の実験に使用する関東方言、関西方言の意味が正しく理解されていたということ

だ。また、関東方言($M = 4.812$, $SD = 1.018$)と関西方言($M = 4.927$, $SD = 1.340$)に対する好感度の評定の分析を t 検定で行った。それぞれの単語の好感度の評定に有意差がみられなかった($t(48) = -0.524$, $p = .603$)。つまり、本実験で使用した関東、関西の単語の好感度に差はなかったと言える。

潜在的評価

潜在的評価(IAT)について関東、関西方言に反応時間に差があるかどうかについて調べるために関東方言と関西方言の反応時間が0と差があるか t 検定を行った。差の数値が大きいほど、関東方言の潜在的な評価は関西方言より高いことを表している。しかし、本研究では有意な結果は得られなかった($t(48) = -0.140$, $p = .889$)。また、お土産における社会的選好で関東方言と関西方言の反応時間に差があるかを分析した。分析の結果、関東、関西方言の反応時間とお土産には、有意な差は確認されなかった($t(47) = -0.543$, $p = .590$)。さらに、顕在的評価と潜在的評価との対応関係を確かめるために、関東方言の暖かさ因子から関西方言の暖かさ因子を引き算した値と反応時間の相関関係を分析した。その結果、有意な相関関係はなかった($r = -.122$, $p = .404$)。また、同様に知的因子についても有意な相関関係はみられなかった($r = .003$, $p = .982$)。さらに、単語確認テストの好感度得点においても相関分析を行った。具体的には、関東方言の好感度得点から関西方言の好感度得点を引き算した上で、反応時間との相関関係を調べた。分析の結果、有意な相関関係は確認されなかった($r = -.230$, $p = .112$)。

考察

本研究は、関東方言と関西方言において、顕在的評価と単語による潜在的評価の態度を測定した上で、物体選択による社会的選好の関連性について検討した。永田(1989)のように、昔は全体的に関東方言に比べて関西方言は低く評価されていた。また、そこから、渡辺・唐沢(2013)のように約30年間で関西方言は暖かさの項目で関東方言よりも高い評価へと変化した。本研究でも同様

の結果が出たことにより、顕在的態度については、変容がなかったことが明らかになった。また、知性の項目においても、知見のとおり関東方言は関西方言より高い評価を得ることとなった。渡辺・唐沢（2013）から5年経った現在も、顕在的態度において変容がなかったと言えるだろう。顕在的評価における、関東方言は知的評価が高く評価され、関西方言は情的評価が高く評価されるという仮説と一致する結果となった。小林（2004）によると、方言は会話の内容だけではなく、相手との間柄とそれに伴った心理的距離を表明するものへと変化している。例えば、関西方言話者が関東方言を使用する時には、相手に対して一枚壁があり、親しくなりたくないなどのメッセージを含んでいる。関西方言を使用する場合は、親しい間柄であり、気取った態度はとりたくないというメッセージを含んでいる。このように、心理的メッセージがあると、関西方言に暖かい印象を受けたのではないかと考えることができる。

社会的選好における物体選択では、関東方言話者と関西方言話者の選択人数に有意な差がみられなかった。奥村・鹿子木・竹内・板倉（2014）の研究結果とは一致しなかった。先行研究については関西方言を養育環境とする参加者に限定したので、有意な差がみられたのではないかと推測される。しかし、本研究の分析により、関西方言の使用年数と選択に関連性がないことがわかっている。つまり、養育環境である関西方言話者から選択するという知見は得られなかったということだ。今後、出身地別での選択傾向を分析していく必要があると考えられる。また、顕在的な関東方言の評価と物体選択には相関がみられなかった。しかし、関西方言においては物体選択との間に相関関係がみられた。すなわち、関西方言に良いイメージを持った人は社会的選好において関西方言話者を選択するということだ。井上（2014）によると、笑顔は明るく、暖かい印象を与えることが多く、初対面の相手への好感度が高いことがわかっている。さらに、他者が対象に向ける表情や視線はその他者が対象に向ける評価を示すものであると考えられている（布井・吉川，2016）。具体的には、喜び表情の視線の先の対象が良いものであるという手がかりになるのだ。また、対象への好感度が喜び

表情によって上昇することも明らかにしている。こうした研究から、顕在的に暖かい印象をもつ関西方言を高く評価すると関西方言話者の物体を選択したのではないかと考えられる。また、潜在的な評価においては、有意な差は見られなかった。よって、潜在的に関東方言が高く評価されるのであれば、関東方言話者の物体を選択するという仮説とは一致しなかった。しかし、新たに顕在的に関西方言を高く評価すると、関西方言話者の物体を選択したという知見を得ることができた。つまり、社会的選好には、顕在的態度が関連していることが示唆される。

潜在的評価においては、物体の選択、関東方言と関西方言に有意な差はみられなかった。先行研究においては、関東方言が関西方言よりも一貫して肯定的に評価されるという結果がでている。なぜ、本研究では、有意差がみられなかったのだろうか。1つ目の原因として、方言離れが挙げられる。大阪教育大学附属天王寺中学校の自由研究で、関西弁話者の方言意識は他地域よりも関西方言に好意的であるという結果が出ている。しかし、青木・大野・仲川・長谷川・星・倉智（2013）によると、高齢者に比べて、若者は方言の使用頻度が少ない結果が出ており、方言離れをしているということが示唆されている。方言離れが生じた理由の予測として、テレビやインターネットなどで関東方言を喋る人がほとんどであり、関東方言をオソドックスのものであり使い分けるといったことが一般的になっていると考える。また、それらの影響を受けて「方言はカッコ悪い」、「田舎者だと思われる」などの否定的なイメージを持っているからではないかと考える。なお、青木・大野・仲川・長谷川・星・倉智（2013）では、新潟県在住者を対象としているので、方言全てに当てはまるとは言い難い。よって、関西方言で同じように方言離れを起こしているのか再度、検証する必要があると考えられる。また、2つ目の原因として、関西方言の標準語化が原因として考えられる。井上（1983）は、「新方言」というものを定義づけている。3つ条件があり、1つ目は、若い世代での使用が増えているということ。2つ目は、関東方言と一致しないこと。3つ目が、地元で方言扱いされているということである。具体例をあげると、本

来の関西方言では、「けーへん」「きーひん」という使用の仕方をしていたが、「こない」という関東方言と「けーへん」という関西方言が合体した、「こーへん」は新方言である。このような「新方言」の使用率が高いということになると、方言の標準語化が進んでいると言えるのではないだろうか。実際、大阪教育大学天王寺中学校の自由研究によると、新方言を使用している若者は、6割程度使用しているという結果が出ている。特に大人(20歳以上)に比べて子供(20歳未満)では、複数の方言においてそれぞれ20%以上使用率が高くなっている。すなわち、今後も標準語化は進行し続ける可能性がある。よって、この先も潜在的な評価の部分で有意差はでないのではないだろうか。この点については、数年後に再検証する必要があるだろう。

最後に、本研究の課題を挙げておく。まず、年齢による方言についての評価の違いが明らかでない。本研究での実験参加者は大学生を対象とした。これは、先行研究が幼児であったので言語発達が完全ではないと考えたからだ。しかし、大阪教育大学附属天王寺中学校の自由研究(2018)で年齢(当時の20歳以上を大人、20歳未満を子供)でわけ、新方言の使用率を研究したところ、子供の使用率が非常に高い結果となった。つまり、大人に比べて子供の関西方言の標準語化は進んでいると推測される。本研究では、潜在的評価において、関東方言と関西方言に有意な差はみられなかった。これは、関西方言の標準語化が進んでいたからではないかと考えられる。よって、大人と子供では潜在的評価で有意差が出るのではないかと仮説をたてることができる。この仮説を検証することを今後の課題とする。

さらに、関東方言や関西方言以外での検証が必要である。山岸(2008)によると、普通の音声では、関東方言と関西方言では、聞き手の受け止め方を考えていないという意味で「ぞんざい」と感じる傾向が見られるが、撥音を長くすることによって関東方言では、「ぞんざい」と感じる人は増加し、関西方言では、「ぞんざい」と感じる人が減少した。つまり、撥音やアクセントにより受ける印象などは異なるということだ。よって、関東方言と関西方言では有意差が出なかった部分も撥音やアクセ

ントが異なる方言(東北方言や沖縄方言など)で検証し比較することにより、新たな知見を得ることができるかもしれない。

引用文献

- 青木 理紗・大野 華純・仲川 瑞希・長谷川 智美・星 芙美香・倉智 雅子(2013)新潟方言:県民の方言理解と使用に関する一研究 新潟リハビリテーション大学紀要, 2, 75-78.
- 井上 清子(2014). 表情が初対面の相手に与える印象 生活科学研究, 36, 183-194.
- 井上 史雄(1980). 方言のイメージ 言語生活, 341, 48-53.
- 井上 史雄(編)(1983)「新方言と言葉の乱れに関する社会言語学的研究～東京・首都圏・山形・北海道～」科学研究費 総合研究 A 研究成果報告書 183-208.
- 大阪教育大学附属天王寺中学校 自由研究(2018). December 15, 2022, from <91E6825382528 F5 781408 EA997528CA48B862E696E6464> (osaka-kyoiku.ac.jp)
- 岡本 真一郎(1985). 言語的スタイルが説得に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 25, 65-76.
- 岡本 真一郎(2001). 名古屋方言の使用が話し手の印象に及ぼす影響を用いて 社会言語科学, 3, 4-16.
- 奥村 優子・鹿子木 康弘・竹内 祥恵・板倉 昭二(2014). 12ヵ月児における方言話者に対する社会的選好 心理学研究, 85, 248-256.
- 鎌谷 美希・伊藤 資浩・宮崎 由樹・河原 純一郎(2021). COVID-19 流行が黒色衛生マスク着用者への顕在的・潜在的態度に及ぼす影響 心理学研究, 92, 350-359.
- 小林 隆(2004). アクセサリーとしての現代方言 社会言語科学, 7, 105-107.
- 小林 隆(2008). 方言の20世紀(日本語の20世紀, 日本語学会2007年度春季大会シンポジウム報告), 4, 213-215.
- 田中 ゆかり(2007). 「方言コスプレ」にみる「方言おもちゃ化」の時代 研究論文, 8, 123-133.
- 永田 高志(1989). 言語意識の共通語化—関西方言を例に— Sophia Linguistica: Working

- Papers in Linguistics, 27, 237-242. (Nagata, T. (1989). The change of language attitudes toward Standard Japanese in the Kansai dialect. *Sophia Linguistica: Working Papers in Linguistics*, 27, 237-242.)
- 布井 雅人・吉川 佐紀子 (2016). 表情の快・不快情報が選好判断に及ぼす影響—絶対数と割合の効果— 心理学研究, 87, 364-373.
- 町 一誠・樋口 匡貴・深田 博己 (2006). 話し手の方言使用と印象: コードスイッチの適切さと聞き手の出身地による影響 社会心理学研究, 21, 173-186.
- 森岡 博明 (2007). 潜在的連合テスト (Implicit Association Test) の可能性 教育テスト研究センター 第4回研究報告書, 1-2.
- 山岸 智子 (2008). 撥音の長さによる知覚の差—首都圏方言話者と近畿方言話者— 社会言語科学, 11, 164-169.
- 渡辺 匠・唐沢 かおり (2013). 関東方言と関西方言に対する顕在的・潜在的態度の検討 心理学研究, 84, 20-27.